

ケースメソッドを取り入れた公衆衛生看護技術演習の学習効果

キーワード：ケースメソッド、課題解決能力、自己効力感、学習効果

○渡邊路子¹⁾、坪川トモ子¹⁾、田辺生子¹⁾、伊豆麻子¹⁾
新潟青陵大学¹⁾

I 目的

事業化・施策化の基本的能力を養うことを目的とした公衆衛生看護技術演習に、ケースメソッドによる教育法を取り入れた効果を検討することを目的とする。

II 方法

1. 調査対象：A大学プライマリヘルスケア論履修学生 52名
2. 調査期間：2014年11月～2015年2月
3. 調査方法：公衆衛生看護技術演習にケースメソッドを取り入れた演習を行い、実施前後に自記式質問紙調査を行った。
4. 演習のプロセス：ケースメソッドは討議中心の教授法であり「判断のための教育」として多くの分野で採用されている。ケース教材提示→設問→個人予習→グループ討議→発表と複数グループによる討議を段階をおって進めていった。
5. 調査内容：課題解決能力の習得状況については、国家公務員の人物試験内容として開発された指標を用いた。この指標は、積極性、社会性、責任性、情緒安定性、コミュニケーション能力で構成され、各4項目合計20項目の調査である。各項目は「できた」から「できなかった」までの4件法で質問する。自己効力感の測定には、GSES-Testを用いた。
6. 分析方法：課題解決能力の習得状況は、「できた」4点～「できなかった」1点と点数化し、Wilcoxonの符号順位和検定を行った。自己効力感の変化は、t検定を行った。統計解析にはSPSS Statistics22を用いた。
7. 倫理的配慮：学生には、自由意志による参加であること、参加の有無・回答内容により不利益が生じないことを、口頭および文書により説明し、同意書への署名をもって同意を得た。

III 結果

回収数 52名（回収率100%）のうち質問項目のすべてに回答のある48名（有効回答率92.3%）を分析対象とした。

1. 課題解決能力の習得状況

積極性、社会性、情緒安定性、コミュニケーション能力においては全ての項目で有意差がみられ、責任性においては4項目中3項目で有意差がみられた（ $p < 0.05$ ）（表1）。

2. 自己効力感の変化

自己効力感の得点の平均値は、実施前6.2（最小値0、最大値14、SD4.19）、実施後6.4（最小値0、最大値15.0、SD4.29）であり、実施前後で有意差はみられなかった（表1）。

表1 演習実施前後の課題解決能力と自己効力感の変化(N=48)

	実施前		実施後		p値
	平均	SD	平均	SD	
積極性					
自らの考えを積極的に伝える	2.8	0.66	3.5	0.55	0.000 ***
考えが前向きで向上心がある	2.6	0.70	3.2	0.59	0.000 ***
グループ活動では目標を高く設定し率先してことに当たる	2.6	0.74	3.1	0.68	0.000 ***
困難なことにチャレンジする姿勢がある	2.7	0.77	3.3	0.60	0.000 ***
社会性					
相手の考えや感情に理解を示す	3.3	0.60	3.7	0.46	0.000 ***
異なる価値観に理解を示す	3.2	0.56	3.7	0.47	0.000 ***
メンバーと信頼関係が築ける	3.3	0.56	3.7	0.54	0.000 ***
グループ演習の目標達成と活性化に貢献する	2.9	0.63	3.3	0.58	0.000 **
責任性					
相手や結果を問わずに誠実に対応する	2.9	0.64	3.5	0.54	0.000 ***
グループ演習に対する気構えがある	3.1	0.58	3.3	0.71	0.19 ns
自分の行動決定に責任を持つ	3.3	0.61	3.5	0.50	0.01 **
困難な課題にも最後まで取り組み結果を出す	3.0	0.55	3.3	0.52	0.000 **
情緒安定性					
落ち着いて安定性がある	2.6	0.70	3.2	0.72	0.000 ***
ストレスに前向きに対応する	2.6	0.73	3.0	0.74	0.01 **
環境や状況の変化に柔軟に対応する	2.7	0.64	3.3	0.61	0.000 ***
自己を客観視し、場に応じて自分をコントロールする	2.8	0.63	3.2	0.65	0.000 ***
コミュニケーション能力					
相手の話の趣旨を理解し的確に対応する	2.9	0.57	3.4	0.54	0.000 ***
話の内容に一貫性があり論理的である	2.3	0.82	2.9	0.53	0.000 ***
話し方に情熱があり積極的である	2.2	0.74	2.8	0.60	0.000 ***
話し方が分かりやすく説明に根拠がある	2.2	0.66	2.9	0.55	0.000 ***
GSES-Test得点	6.2	4.19	6.4	4.29	0.682 ns

Wilcoxonの符号順位和検定、t検定 $p < 0.05$ *、 < 0.01 **、 < 0.001 ***

IV 考察

公衆衛生看護活動の中で、地域の健康課題を把握し、その背景を明らかにして解決策に取り組むこと（事業化・施策化）は保健師活動の重要な役割であり、課題解決能力が求められる。ケースメソッドでは、テキストではなく、実践的なケース教材が用いられることやSTEP1からSTEP6まで順をおってストーリーをたどることが学生の思考の手助けとなっており¹⁾、課題解決能力が向上したのではないかと考えられる。また、個人予習→グループ討議→発表へと進む段階で学生は、協働作業を行い、討議を通して主体的に学び、積極性、社会性、責任性、情緒安定性、責任性などの課題解決能力を向上させていったと考えられる。

一方、自己効力感の向上については、有意差は認められなかった。自己効力感とは、学生生活全般を通して自己評価されると考えられるため、一授業の実施前後で効果判定をすることは困難と思われる。しかし、合計得点のわずかな増加は認められていることから、課題を解決しながら、達成感を積み重ねていくことは自己効力感の向上に繋がる可能性がある。引き続きケースメソッドを取り入れた演習を行うことは意義があると考えられる。

V 結論

ケースメソッドを取り入れた演習は、課題解決能力を向上させる効果があることが示唆された。

なお、本研究は信州大学への研究協力として行ったデータの一部を分析したものである。

引用文献

- 1) 奥野ひろみ、五十嵐久人ら. 公衆衛生看護を学ぶ学生のためのケースメソッド演習の開発とその効果に関する研究. 信州公衆衛生雑誌. 2014; 8(2): 73-79